

県漁連と岐阜薬科大が協定

鮎は健康食品 PR強化

目を守る成分豊富

県漁業協同組合連合会と岐阜薬科大(岐阜市大学西)が、鮎の研究と提供に関する連携協定を結んだ。県漁連が長良川の天然鮎を提供し、大学側が栄養成分や健康効果に関する研究に取り組む。(大賀由貴子)

岐阜大では2020年、中村信介准教授(43)＝薬理学Ⅱや原英彰学長らの研究グループが、長良川の天然鮎にヒトの目の機能維持に重要とされる天然色素「ゼアキサンチン」という成分が多く含まれ、特に鮎の目の中に豊富にあることを発見。科学雑誌に発表した。この成果を受けて県漁連は、研究を後押しすることで長良川の天然鮎の価値をさらに高めようと岐阜大に声をかけ、協定が実現した。協定に基づき、県漁連は

長良川「研究進め食卓へ」 天然物

岐阜大の要望に応じて長良川の天然鮎や鮎に関する情報などを提供する。大学側は、全学的に鮎に関する研究に取り組む。

鮎の研究に関して連携協定を結んだ(右から)原英彰学長、尾藤義昭会長と中村信介准教授。岐阜市大学西、岐阜薬科大



岐阜大で締結式があり、原学長は「鮎は岐阜を代表する水産物で観光資源。成分を徹底解明することで地域貢献につなげる」と意気込んだ。県漁連の尾藤義昭代表理事会長は「子どもたちの魚離れが進んでいる。身近な魚である鮎を少しでも食卓に載せてもらう上で、健康効果のアピールはメリットになる」と期待を寄せた。